方向

第一四七号　一九九二年九月一日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

盲目からの解放

―法華経巡礼　75―

1992 8 19　原田憲雄

衆生はあまたであるから、その理解のしかたも、信じかたもさまざまである。そのようにさまざまの信解をもつ衆生が、三界を出離して真実を目指すとしても、かれらの到達する涅槃は、ただ一つのものなのか、あるいはその信解に応じて、二つあるいは三つというふうに分岐するのかどうか、というのがマハー・カーシャパの問いである。これに対して。

05-13. 世尊は言われた――

一切の法が平等であることに覚醒することから、カーシャパよ、涅槃がひらける。だから、ただ一つあるだけで、二つでもなく、三つでもない。それだから、カーシャパよ、あなたのために譬え話をしてあげよう。譬え話によって、聡明な人は、説かれた言葉の意味をさとるだろうから。

bhagavān āha sarva-dharma-samatā'vabodhād dhi kāśyapa nirvāṇam / tac caikaṃ na dve na trīṇi / tena hi kāśyapopamāṃ te karisyāmy upamayehaikatyā vijña-puruṣā bhāṣitasyārtham ājānanti //

慧命摩訶迦葉。白仏言。世尊。彼諸衆生。種種信解。若出三界。彼等為一涅槃。為当二三。仏告慧命摩訶迦葉。若覚諸法。体等涅槃。彼亦唯一。無有二三。迦葉。以彼義故。我当為汝作喩。以此喩故。有智丈夫。

則当解我。所説之義。

「若覚諸法。体等涅槃」がわかりにくい。梵文からいえば「若覚諸法平等。即是涅槃」とでもありそうなところだが、あるいは「体」は、前の句の諸法を「覚」ることをさすのであろうか。

05-14. たとえば、カーシャパよ、生れついての盲目の人は言うだろう「よいとかよくないとかいった色のものは存在せず、よいとかよくないとかいった色のものを見る人々もない。太陽や月はなく、星座も星も存在しないし、星を見る人々もない」と。

tad-yathā kāśyapa jāty-andhaḥ puruṣaḥ sa evaṃ brūyān na santi suvarṇa-durvarṇāni rūpāṇi na santi suvarṇa-durvarṇānāṃ rūpāṇāṃ draṣṭāro na staḥ sūryā-candramasau na santi nakṣatrāṇi na santi grahāna santi grahāṇāṃ draṣṭāraḥ /

迦葉。譬如生盲丈夫。作如是言。無有好悪等色。亦無好悪等色可見。無有日月星宿等。亦無星宿等可見。

05-15. すると、他の人々が、生れついての盲目の人のまえで言うだろう「よいとかよくないとかいった色のものは存在し、よいとかよくないとかいった色のものを見る人々もいる。太陽や月もあり、星座や星も存在し、星を見る人々もいる」と。だがその生れついての盲目の人は、これらの人々を信ぜず、了解しないだろう。

athānye puruṣās tasya jāty-andhasya purata evaṃ vadeyuḥ / santi suvarṇa-durvarṇāni rūpāṇi santi suvarṇa-durvarṇānāṃ rūpāṇāṃ draṣṭāraḥ staḥ sūryā-candramasau santi nakṣatrāṇi santi grahāḥ santi grahāṇāṃ draṣṭāraḥ / sa ca jāty-andhaḥ puruṣas teṣāṃ puruṣāṇāṃ na śraddhadhy-

ān noktaṃ gṛhṇīyāt /

有異丈夫。於彼生盲者前。説如是言。有好悪等色。亦有好悪等色可見。有日月星宿等。亦有星宿等可見。

生盲丈夫。雖聞其説。而不信受。

05-16. そのとき、一切の病気に通じた医師がいたとしよう。かれは生れついての盲目の人を見て、こう思うだろう「この人は、過去のよくない行為によって病気が生じたのだ。病気が生じるとすれば、すべて四種類で、風性のもの、胆汁性のもの、痰性のもの、複合性のものである」と。

atha kaś-cid vaidyaḥ sarva-vyādhi-jñaḥ syāt/ sa taṃ jāty-andhaṃ puruṣaṃ paśyet tasyaivaṃ syāt/ asya puruṣasya pūrva-pāpena karmaṇā vyādhir utpannaḥ / ye ca ke-cana vyādhaya utpadyante te sarve catur-vidhā vātikāḥ paittikāḥ ślaiṣmikāḥ sāṃnipātikāś ca /

時有良医。能知諸病。見彼生盲丈夫。如是念言。其彼丈夫。先有悪業。今有病生。若其病生。則有四種。所謂風黄与癃。及以等分。

「過去のよくない行為」の「過去」は、現在からの過去のすべての時間を指すが、「生れついての盲目の人」にとっては生れる以前を指すであろうから、「前世」ということになろう。前世の「よくない行為」というのは、今のわれわれにはわかりにくい。「行為」を添品は「業（ごう）」と訳し、「よくない行為」を「悪業」とする。「業」はインドの民族信仰の基本にある輪廻観に根ざし、行為を実体視し、われわれのいう個体としての「行為」よりはずっと広範囲のものである。釈尊の教えは、ものごとを実体視することの批判から出ていて、輪廻観もも

とより批判の対象だった。しかし、民俗信仰は、民族の意識の深層から出るものであるだけに、その批判者の側の理論にも侵入しやすい。仏教における「業論」といわれるものの種々相は、仏教がこの民俗信仰をどれだけ批判しおおせたか否かの歴史を反映し、それ自体が広範でここでは語り切れない。『法華経』の本質的な部分における業についての考え方が「薬草喩品」のこの部分と同じかどうかは、検討が必要であろう。

病気を「風性」「胆汁性」「痰性」「複合性」の四つに分類するのが当時の医学だったのであろう。『チャラカ・サンヒター』の第一巻を『インド医学概論』として訳した矢野道雄氏は「仏教経典の中に見出すことのできる医学的記述は、（インド医学の古典である）アーユルヴェーダの初期の状態を知る手がかりとして貴重である」といい、「仏教は古代の科学を容れる大きな器であり、インド科学を周辺の世界へ伝える大きな乗りものであった」といっておられる。『法華経』は仏教経典としては初期のものではなく、「薬草喩品」はまた『法華経』のなかでは初期のものではないようだが、インドの医学文献としてはやはり古い方に属するのであろう。矢野氏の訳本によると、身体を含むあらゆるものは「ヴァータ」「ピッタ」「カパ」の三要素から成り、それらの調和が乱れると病気の原因にもなるので、病素（ドーシャ）とも呼ばれる。このヴァータが「風性」、ピッタが「胆汁性」、カパが「痰性」に対応し、アーユルヴェーダ系の医学では、この三つしか認めないらしい。「添品」では「複合性」が加わっているのだが、この分類をわれわれとしてはそのまま受け取っておくべきだろう。「羅」は音リュウ、病の重篤な状態をさす。

05-17. そこでその医師は、かれの病気を除くために、繰り返し方法を案じ、こう思いつくだろう「たしかにこれ

らの薬はひろく通用されるが、それらによってはこの病気を治すことはできない。しかし山の王のヒマラヤには、四種の薬草がある。四種とは何か。その第一は、一切の色と味の要素に入り込むもの、といい、第二は、一切の病気をゆるめるもの、といい、第三は、一切の毒を解消するもの、といい、第四は、要素に応じて安楽を与えるもの、といい、これが四種の薬草なのだ」と。

atha sa vaidyas tasya vyādher vyupaśamanārtham punaḥ-punar upāyaṃ cintayet tasyaivaṃ syāt / yāni khalv imāni dravyāṇi pracaranti na taiḥ śakyo 'yaṃ vyādhiś cikitsituṃ santi tu himavati parvata-rāje catasra oṣadhayaḥ / katamāṣ catasraḥ / tad-yathā / (W:) prathamā sarva-varṇa-rasa-sthānānugatā nāma dvitīyā sarva-vyādhi-pramocanī nāma tṛtīyā sarva-viṣa-vināśanī nāma caturthī yathā-sthāna-sthita-sukha-pradā nāma / imāś catasra oṣadhayaḥ /

時彼良医。為欲滅其病故。亦復方便。如是思惟。所有薬物。世所行者。彼等不能。療治此病。唯雪山王。有四種薬。何等為四。所謂初名。順入諸色味処。二名。解脱諸病。三名。破壊諸毒。四名。随所住所施与安楽。是為四種。

四種の薬草につき、岩本裕氏は、第一「すべての炎症と膿汁の病根に浸透するもの」（浸透剤）、第二「すべての病苦をゆるめるもの」（解熱剤）、第三「すべての毒を消すもの」（解毒剤）、第四「病根に応じて安静な状態をもたらすもの」（鎮静剤）と訳する。氏は「インド医学序説」を『日本臨床』という医学専門誌に発表しておられるそうだから、その訳は拠り所のあるものなのであろう。ヒマラヤは「雪山（せっせん）」とも訳し、

神仙霊物の集まるところとされ、じっさいに薬草の豊富な産地。

05-18. そこで、この医師は、その生れついての盲目の人に同情して、いかなる方法で山の王ヒマラヤに行くことができるか、その方法を考えるだろう。着いたら、高いところに登り、低いところに降り、横切って捜し、かれはこのように捜して四種の薬草をみつけ、みつけたら、あるものは噛み砕いて与え、あるものは磨って与え、あるものは他の薬と混ぜ煮て与え、あるものは生の薬と混ぜて与え、あるものは針で体を刺して与え、あるものは火で焼いて与え、あるものは他のさまざまな薬と調合し、飲み物や食べ物と混ぜて与えるだろう。こうして、生れついての盲目の人は、このような療法により、視力を獲得するだろう。

atha sa vaidyas tasmiñ jāty-andhe kāruṇyam utpādya tādṛśam upāyaṃ cintayed yenopāyena himavantaṃ parvata-rājaṃ śaknuyād gantum /〈W:〉 gatvā cordhvam apy ārohed adho 'py avataret tiryag api pravicinuyāt / sa evaṃ pravicinvaṃs tāś catasra oṣadhīr āgayed āgaya ca kāṃ-cid dantaiḥ kṣoditāṃ kṛtvā dadyāt kāṃ-cit peṣayitvā dadyāt kāṃ-cid anya-dravya-saṃyojitāṃ pācayitvā dadyāt kāṃ-cid āma-dravya-saṃyojitāṃ kṛtvā dadyāt kāṃ-cic chalākayā śarīra-sthānaṃ viddhvā dadyāt kāṃ-cid agninā paridāhya dadyāt kāṃ-cid anyonya-dravya-saṃyuktāṃ yāvat pāna-bhojan 'ādiṣv api yojayitvā dadyāt / atha sa jāty-andha-puruṣas tenopāya-yogena cakṣuḥ pratilabheta /

時彼良医。於生盲所。発生悲愍。興起如是方便思惟。以彼方便。詣雪山王。到已上頂。或下入。或傍行。周辺観察。既観察已。得四種薬。於中。或以歯等咀嚼。作已与之。或以石磨。或復和別薬物。煮塾与之。

或復和生薬物。作已与之。或針刺身。与作孔穴。或有与火炙焼。或以別異薬物相和。乃至飲食。和而与之。時彼生盲。以方便相応故。即時得眼。

05-20. 視力を獲得したかれは、外も内も、遠くも近くも、月や太陽の光、星座や星など、一切の色形あるものを見て、このように言うだろう「ああ、おれときたら、なんたる阿呆。以前にしてくれた説明を、信じもせず、了解もしなかった。そのおれが、いまは、一切を見ることができる。おれは盲目から解放され、視力を獲得した。おれよりすぐれたものはだれもいないのだ」と。

sa pratilabdha-cakṣur bahir adhyātmaṃ dūra āsanne ca candra-sūrya-prabhāṃ nakṣatrāṇi grahān sarva-rūpāṇi ca paśyet / evaṃ ca vadet / aho batāhaṃ mūdho yo 'haṃ pūrvam ācakṣamāṇānāṃ na śraddadhāmi noktaṃ gṛhnāmi / so 'haṃ idānīṃ sarvaṃ paśyāmi mukto 'smy andha-bhāvāt pratilabdha-cakṣuś cāsmi na came kaś-cid viśiṣṭataro 'stīti /

彼得眼已。内外遠近。日月光明。星宿諸色。皆悉得見。説如是言。嗚呼。我甚愚痴。我聞先説。本不信受。我今此時。皆悉得見。我盲已脱。亦已得眼。無勝我者。

盲目の人の、眼の開いたときの、この喜びの描写は、生動する。

※前号正誤　四頁一五行　〈W: nirvāṇaṃ uta dve〉 → 〈W:nirvāṇaṃ uta dve〉

一六頁一行　「登山江中孤嶼」 → 「登江中孤嶼」

電車に乗って

1992 08

原田　慶

わたしは時々
母のところへ電車に乗る

トンネルを抜けて
一つめの駅につくと
向うのホームで
ぶかぶかのショートパンツのひとが
骨だけの足で立ち
大きな目と口をあけてしゃべっている
おどろいてよく見たら
その人と同じおでこの幼児を抱いて
おばあさんがやっぱり
骨ばかりで笑っていた

あれはたぶん気まぐれな
かりょうびんがの母娘
妙声美音の極楽鳥
そのうちにぱっと羽ばたいて
空の向うへ飛んで行く

電車が動き出すと
ノウゼンハレンの大きな花束をかかえた
白い家が見える
あそこでは毎年この季節に
みごとな金色の花が咲く
はるか遠くのメタセコイヤの丘は
その林がすっかり切り倒されて
新しい家が建ち並んだが

絵の中のようにいつも忘れられている

電車はまたトンネルを抜けて
次の駅に入る
立ちはだかった屏風岩のような
高いビルが町をかくしてしまったので
ここはいつも日陰のようにうらがなしい
走ってきた人の目の前でドアが閉じて
残念そうな人を置いたまま
電車は走り出した

次に止まると何気ないふうで
ホームへ降りた人が駅員と話している
だれでも時には
自分の行く方向がわからなくなることがある
いつも同じところばかりにいると

そういうことを忘れてしまう

次の駅でわたしは降りた
構内の売店の前でピンクの制服の店員が
向かいあって話していた
鏡かと思いながら通りすぎようとして
そのことに気づいてはっとしたら
となりで誰かが階段を踏みはずして
ダダッと音をたてた
その人は
靴をたしかめるように足を裏返してから
なんでもなく
一気に駆け下りて行った

わたしはゆっくりと
駅の階段を下り

見なれた町の垢じみたベンチをさがして
これから乗るバスのことだけを
考えていた

ザクロ

1992 08　　原田慶

くもり空の中で
憩っているザクロ
針を持つしなやかな細枝に
いくつもの実をつけ
風が来るとゆっくり揺れる
いつかおぼえた子守歌
「ねんねこしゃっしゃりませがいい」
と子どもがいう
「子どもは可愛いかい」
「そりゃ可愛いよ、でもわからない、
突然よってたかって狂気のように
弱い者をいじめる、もうそれはふつうじゃない
と思った。どうしてあんなに憎むのだろうか」
「たぶん根っこはどこまでもつながっているよ
ひとりひとりみんなのところに」

今年はセミが遅かった
スズメが騒いでいる
もう彼らの季節なのだろう

ザクロの実は大きくなって
自分の重みで木をゆする
「夏も終りだね、飛行機が来たよ」
「どこへ行くんだろう」
「世界中どこへでも行くんだ、いろいろ知って
　僕たち
決めなければ　これからのこと」

木はゆする
ゆらゆら揺れるザクロ
口をつぐんだまま考えこんでいる

少し赤く色づいた丸い実
大勢で弱い子どもをいじめてはいけないよ
雲はまぶしく光り

スズメはさえずりやまず
風が来て
クルミもタラヨウもいっせいに揺れる

「もう秋だね」
「うん遠い電車の音が聞こえる」

カボチャの花

1992 08　　原田　慶

今年も梅雨の終りにカボチャの芽がたくさん出た。埋めておいた生ごみの中の種だから、ずいぶん深い土の中

から太陽の光を感じる方向へ、いっしょうけんめいに伸びてくるのだろうと思う。白い茎が上へ上へと伸びるようすを想像すると、大泥棒のカンダタがクモの糸にすがって光の見える方へよじ登ったことなど思い出すけれど、あのカンダタが再び地獄へ落ちなければならなかったのは、わたしたち多くの者の罪なのだろうと思う。

深い地中からやっと太陽の見えるところへ出たカボチャの芽は、もちろんそこが極楽浄土だなどと思ってはいない。つるを伸ばし葉を繁らせ、花を咲かせて実を結ばなければならないという、種子に組み込まれた役目を果たすためのひたむきな努力にちがいない。しかしたいてい、頑張りもこのあたりまでである。一かたまりになって、われもわれもと芽を出し、ゆずりあおうなどとは考えないから、放っておけばみんながくたびれて枯れてしまうか、うまいぐあいに雨などが降って、かろうじて生き残ったものがあっても、青白くやせ細って、小さな雄花を二つ三つ咲かせるのが精いっぱいということになる。

以前に二度ほどこのカボチャを育ててみたが、うまくゆかなかったので、今では庭で野菜を作ろうなどとは思わなくなった。今年もカボチャの芽をひょいひょいとつまんで捨てていたけれど、ほんの気まぐれで一ばん元気そうなのを一本だけ残しておいた。水をやっていればあの黄色い燭台のような花をぽかぽかと咲かせるだろう。実はできなくても雄花ばかりでもいい、なんとなく底抜けに明るいあの花が見たい。じっさい、カボチャの雄花は、一日花がほとんどそうであるように、無欲であっけらかんとしているように見える。朝早く咲き、細い茎の上に大きな花をまっすぐ支えて、何か立派なことをやりそうな顔をしているが、昼頃にはもうぐったりと傾いていたりする。

一本だけのカボチャが一メートル余り伸びた頃、葉の茎のわきに雄花のつぼみがいくつかつき、先の方に雌花が二つもついたのだった。よほど種子が元気だったらしい。こうなるとやはり実をならせてみたくなって、そこまでつるの芯を止めた。つるの根もとに近い方に雄花がいくつもあるのだから、順序からいえばその方が先に咲く。中には雌花と同じ日に咲くものもあるだろうとわたしは考えた。

ところが何ということだろうか。雌花は思ったよりもおませなようで、つるの先のほうについた幼い

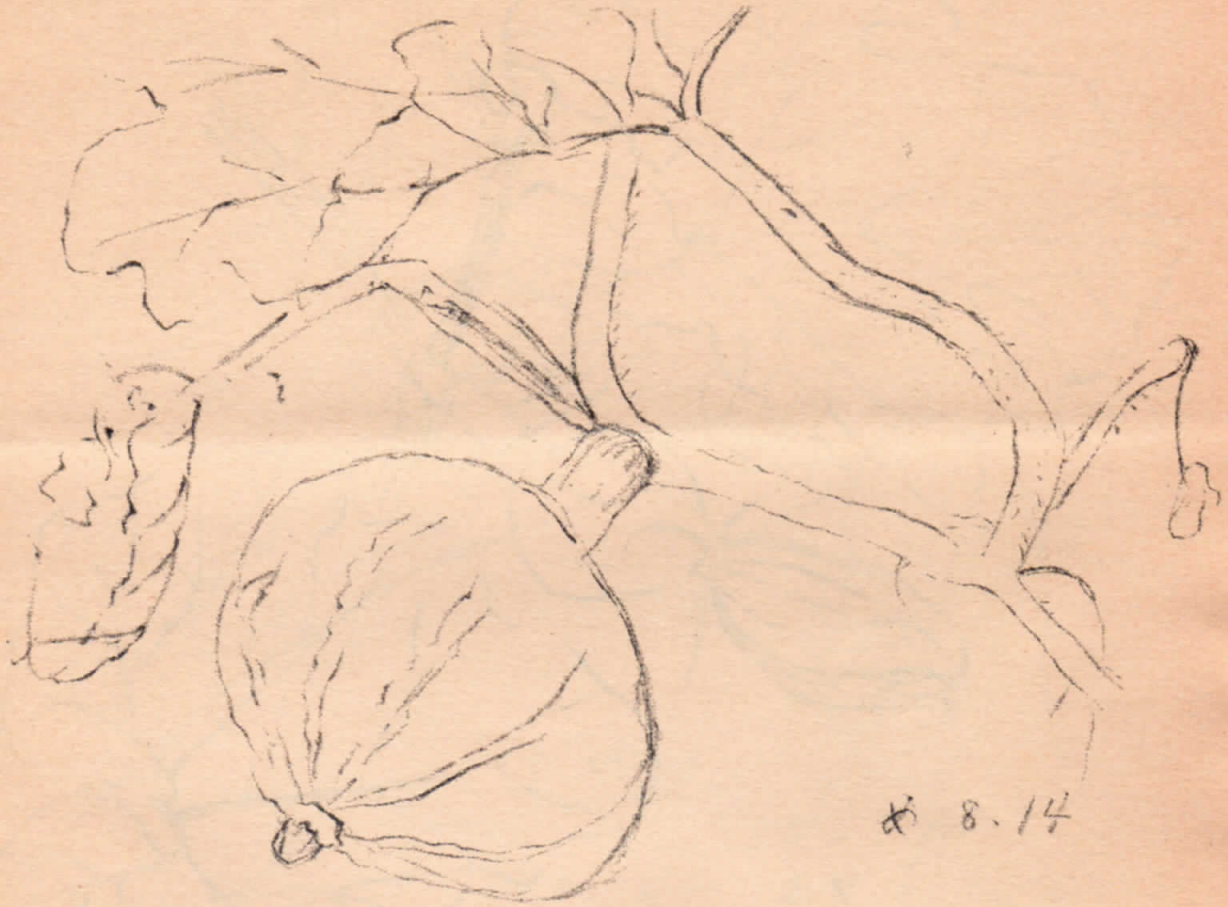
花が、みるみるふっくらと美しくなり、ほんの数日で、みごとに大きな花を咲かせたのである。それは七月六日だった。一つだけ咲きそうになっていた雄花はこの日にはまだ咲かず、翌日七日になってから開いたけれど雌花は昨日のうちにしおれてしまっていた。がっかりしたが、まだ豆粒ほどのうすい緑の玉をつけた雌花が一つ残っている。この花が咲く頃には雄花もいっぱい咲くにちがいない。

ところがまたこの小さな花が大急ぎでふつくらと大きくなり、まだ若すぎると思っていたのに、信じられないが翌日八日に花を開い

てしまった。ずつと先からついていた雄花はまだ咲く気配もなく知らん顔でつっ立っている。ああこれで実を結ばせようという夢は早早に消えてしまった。

それにしてもカボチャの雌花がこれほどに咲き急ぐものだということを、わたしは知らなかった。少しでも早く咲いて、実を育てなければならないという使命感が雌花を急きたてるのだろうか。

もとから雄花を見るつもりだったのだからいいわと気をとりなおして、わたしは水と少し肥料なども根もとに置いてやった。それから思い出して、昭和十年発行の古



い『実用園芸』という本を出してカボチャの作り方のところを読んでみた。

種をまくのは三月のはじめから中頃、床温二十四度を標準として方十センチに一粒宛まくとある。今はビニールハウスがあるが、以前は苗床も手作りだった。まず大きさを決めて、それを取り囲む形に何本か杭を打つ、その杭に二段か三段くらい横棒をくくりつけてわくを作り、それに稲藁を縄できつけながらぴったり並べて箱のようにする。その中へ、よくふるった細かい土に石灰をまぶしておいたものを入れるのである。ふた

は割竹に藁をはさんでなわで編みつけた戸のようなものを作り、閉めたりはずしたりして温度の調節をする。このような温床で、カボチャ、ナス、トマト、スイカ、マクワウリ、サツマイモなどの苗を作るのだった。

続いて本を見ると、種から芽が出たらすぐ別の床に移し、さらに本葉が二～三枚の時に別の温床に移す。五月のはじめから中頃に苗のまわりを包丁で深く切り、細根を多く出させてから定植する。

定植後、本葉六～七枚が出てきた時、四枚を残し摘芯し、側枝を四本出させてこれを二ほんずつ左右に伸ばすと、その四～五節めに結果して一番成り四個を収穫することができる。

カボチャなんて、昔からあまりお上品な扱いを受けてこなかったように思うのに、これほどにしなければ実をとることはできないものだったのだろうか。

そのうちに、庭のカボチャも側枝を何本か伸ばし、それぞれに小さな実を持った雌花も二個ずつくらいついた。今度は雌花と雄花が出あってくれますようにと願いながら毎日のぞいていた。

七月十三日、側枝の一つめの雌花が咲いた。その日は雄花がたった一つ咲いていたので、それをちぎって花びらを除き、花粉を雌しべにつけて受粉させた。虫が来るのなど待っていられなかった。これで一つだけは実を留めることができたかもしれない。この頃には、先日咲いた二つの雌花は実が黄色くなって根もとから落ちてしまっていた。この後は七月十六日雌花がひとつ開花、雄花なし。十八日雌花が二つ、雄花なし。翌十九日雌花無し、雄花が五つ。二十日雄花ばかり六つ。二十一日雄花が七つ、それからはずっと雄花ばかりが四つ、三つと咲き続けた。雌花は何かにじゃまされて開ききらなかったり、小さいままで落ちたりして、後には一つも咲かなかった。

たった一つ雄花と出あって受粉できたカボチャの実は、養分をたっぷり吸収できたと見えてぐんぐん大きくなり、八月の中頃には直径二十センチくらいの大きなカボチャになった。

今まで知らなかったが、雌花と雄花の成長の速さがずいぶんちがうので、一本だけの木では、互いがであい難く、思ったより受粉の機会が少ないことがわかった。少なくとも二本以上植えなければ実を結ぶことはほんとうにむつかしいようである。

いつかテレビでツユクサの花のことを見た。この花は雌しべと雄しべを持っているが、よい種子を得るためには、他の花の花粉をもらった方がよいので、雌しべは雄しべより長く外へ伸びている。しかし虫が来て他の花の花粉を運んで来てくれるのが待ち切れない時には、雌しべを花の中に巻き込んで自家受粉をするのだそうである。カボチャは雌雄の花が別なので、両方が出あわないとけっして実を結ばない。完ぺきでいさぎよいような気もする。

母の所へ行って、帰りのバスの中で、子どもの頃の友達に出あった。その人は家の裏に六坪ほどの畑を持っていて、トマト、ナス、キュウリなどを作っていると言った。わたしが庭のカボチャの話をすると、「カボチャはむつかしいわ、知らんうちに実が黄色うなってみんな落ちてしもてるし、一つもなったことがない。カボチャはよう作らんわ」と言ったので、わたしは大変意外だった。カボチャなんて植えておけば、ごろごろと大きな実ができるものだと思い込んでいたのは、やはりわたしが、栽培する人の苦心をよく知らなかったせいのようである。

収穫したカボチャは、まだそのまま大事に置いている。

美人

（中国の詩人と仏教　二四）

1992 07 05

原田憲雄

謝霊運の四十歳から死にいたる間にも優れた作品は多いのですが、そのなかに「石門」をうたう詩が数首あって注目されます。この「石門」は、廬山のそれではなく、今の浙江の嵊県にある山で、霊運の故郷始寧（浙江上虞県）の南約五〇キロ、近代の文学者魯迅の故郷紹興の東南約五〇キロ。まず作品を挙げましょう。「石門に新たに住する所を営む。四面は高山・廻渓・石瀬・脩竹・茂林」（石門新営所住四面高山廻渓石瀬脩竹茂林）。

躋険築幽居　こごしきに庵をきづき
披雲臥石門　雲わけて岩戸にぞふす
苔滑誰能歩　苔ぬめりたれか歩まむ
葛弱豈可捫　葛よわく縋りがたけれ
嫋嫋秋風過　そよそよと秋風わたり
萋萋春草繁　さえざえと春草しげし
美人遊不還　よき人はゆきて還らず
佳期何由敦　いつのひに睦み交さむ
芳塵凝瑶席　塵ふかき君のしとねや
清醑満金尊　清き酒　樽に満てるに

洞庭空波瀾　洞庭ハアハレナミダチ
桂枝徒攀翻　桂ノ枝ヲ空シクタヲル
結念属霄漢　天の川に念ひむすぼれ
孤景莫与諼　独りゐて忘れがたしも
俯濯石下潭　岩渕にふして手すすぎ
仰看条上猿　梢わたる猿をあふぎ見
蚤聞夕颯急　夜風かとあしたに聞き
晩見朝日曒　朝の日と夕べ見まがふ
崖傾光難留　崖かたむき光およばず
林深響易奔　森ふかく響かふはやし
感往慮有復　嘆き尽きて思慮かへり
理来情無存　道理いたり村肝やすし
庶持乗日用　悠々とここに明け暮れ
得以慰営魂　疲れたる魂なぐさめむ
匪為衆人説　諸人のためには説かず
冀与智者論　願はくは智者と論ぜむ

作時はかれが故郷の始寧に隠居した時期です。隠居は二度。第一次は、四二三年三十九歳で永嘉郡（浙江温州）の太守をやめた秋から、四二六年四十二歳で秘書監に就任するまで。第二次は、四二八年四十四歳、侍中で休職を願い帰郷してから、四三一年四十七歳、臨川内史に任ぜられるまでです。かれの石門詠が、そのどちらの時期に作られたのかは明らかではありませんが、おおむね第二次のものと認められましょう。

初句にいうように、かれが峻険の山を開きそこに幽居を築こうとしたのは、第二句にいう「石門」を見出したためで、それが廬山の石門によく似ていたからです。廬山の石門は、慧遠の「廬山記」に、

西に石門あり。その前は双闕に似、壁立千余仞にして瀑布流る。

といい、廬山諸道人の「遊石門詩」にも、

双闕その前に対峙し、重巌その後に映帯す。

というものでしたが、嵊県のは、謝霊運じしんが「遊名山志」に、

石門の澗は六処あり。石門は水を遡りて上り、両山の口に入る。両辺は石壁。右辺の石巌、下は澗水に臨む。

といい、廬山の石門に彷彿します。見出した謝霊運は、慧遠が思い出され、なつかしくてたまらず、「石門」と名づけ、庵を築いたのです。なつかしくても、普通の人には、そこに名をつけ、幽居を築くことなど、思いも寄らないでしょうが、それを思いつき、思いつけば実現できたのが、当時の謝霊運でした。嵊県の石門は廬山の慧遠を記念して霊運が作り、石門詩篇はかれの意識の深層にひそむ慧遠追慕の情から流れ出たものといえましょう。

第七句「美人遊不還」の「美人」は、『詩経』簡兮に「ここに誰をかこれ思う、西方の美人」とうたい『楚辞』

少司命に「なんじの髪を陽の阿にかわかさんとす、美人を望めども未だ来たらず」という美人で、男女にかかわらず「よいひと」「すぐれたひと」の意で、場合によって君主や神にも当てるのです。顧紹柏『謝霊運集校注』はここの「美人」を、謝霊運の従弟で当時親交のあった謝恵連（しゃけいれん）だとする古人の説を紹介し、賛成しています。そう考えて悪いわけではありません。第十一、二句は楚辞を典故とし、そのことからこの詩が楚辞の発想をとりいれていること、したがってその前後は仮構の夢想であることが察せられます。夢想のなかの人物は変転するのが常で、特定するのは困難。ここでも君主や神にあてられないわけではありません。けれども時間・空間的に近い両者に共通性が多ければ、結合の蓋然性が高く、同じ視野で考えうるわけでしょう。当時の謝霊運とこの詩篇の関連においては、「美人」を謝恵連にも当てえましょうが、慧遠の蓋然性がさらに高いのです。

《山水の空間展開》を描写しながら、それを《感情の漂泊・心理の遍歴の時間展開》へと転移し、最後に《形而上学的な警句》で収束するのが、謝霊運が山水詩において慧遠から学んだ特色です。「石門新営所住」はその詩風の典型で、「感往慮有復。理来情無存」は慧遠の「廬山東林雑詩」の「流心叩玄扃。感至理弗隔」に対応します。

謝霊運と謝恵連の交友の密接だったことはよく知られ、ふたりが知り合ったのは霊運の第一次隠居時代で霊運は四十歳、恵連は二十八歳だったようです。霊運の、さきに指摘したような詩風は、すでに確立していたのですが、ふたりの交際によっても、恵連は形而上学的警句をおのれの詩に持ち込むまねはしていません、霊運に贈る作品においてさえ。そうして、霊運のほうは、恵連に与えたことが明らかな詩では、まるで相手に遠慮したかの

ように、お得意の形而上学的警句をまじえていないのです。

『詩品』という詩論集が伝える『謝氏家録』によると、霊運は、恵連と対していると、巧みな表現を思いついた。のち永嘉県の西堂にいて、詩を考え、終日、完成しなかった。夢のなかでふと恵連に出あったら〈池塘生春草〉の句ができた。だからかれは常に「この句は神助によったもので、わたしの詩句ではない」と言っていた。ということです。

謝霊運が、謝恵連を知るのは、永嘉太守をやめてからでしょうから、伝えには誤りも含みましょうが、にもかかわらず、恵連が感性的な詩人であったこと、その面では、同族の先輩大家である霊運も卑下するほどであったこと、恵連の存在が霊運の感性的発想に刺激を与えたこと、などの消息が生きいきと物語られ、興味ふかいことです。けれども霊運の恵連への期待はそこまでで、形而上学的な方向での談話者としてはあまり期待もしなかったのでしょう。恵連に与える詩にその方面の警句のないのが一証です。さきの「美人」に恵連をあてるより、慧遠を想像するほうがふさわしかろうことを示唆するではありませんか。

晨策尋絶壁　あした出で絶壁たづね
夕息在山棲　ゆふべ憩ふわが山荘に
疏峯抗高館　尾根うがち館きづけば
対嶺臨廻渓　嶺にむかひ渓に臨めり
長林羅戸庭　林ながく庭につらなり

積石擁階基　石つみてきざはし挾む
連巖覚路塞　巖たたみ路ふさぐかに
密竹使径迷　竹むら深く径に迷ひぬ
来人忘新術　来る人は辻を見わすれ
去子惑故蹊　帰る子らちまたに惑ふ
活活夕流駛　かうかうと夕川たぎち
嗷嗷夜猿啼　けうけうと夜を猿なく
沈冥豈別理　潜み住む故あらめやも
守道自不攜　道まもり離れざるのみ
心契九秋幹　霜しのぐ松のこころに
目翫三春荑　春匂ふつばなをめでむ
居常以待終　常ニ居リ　終リヲ待チ
処順故安排　推移ニモ　順応スベシ
惜無同懐客　あはれあらず心等しく
共登青雲梯　青雲にのぼらむひとの

謝霊運の晩年の秀作「石門の最高頂に登る」（登石門最高頂）です。これをめぐる問題については次回。